

## 1. 序文 ～候補犬の導入にあたって～

盲導犬や聴導犬のような道案内、音を伝えるという、ある程度定まった仕事内容ではなく、個々のニーズが定まらず、仕事内容が様々である介助犬はその適性を持つ候補犬を探すことがとても困難である。

実際、候補犬を探す上で多くの問題があった。

その要因は次のようなことが考えられる。

- ・ 遺伝的疾患や遺伝的性格異常はトレーニング開始年齢の1才以降に現れるという点で、子犬は危険性が高い。
- ・ 自家繁殖は整った設備、費用、人員確保が必要なため、現在は不可能である。
- ・ 日本では犬を繁殖する上でライセンスが不要で、遺伝的疾患や性格異常に対する配慮に欠けた繁殖が行われている場合が多いと考えられるため、心身ともに健康な純血種犬が少ないと言われている。
- ・ 介助犬には様々なニーズに対応できるような大型犬が望ましいと考えられるが、日本では大型犬が欧米に比べて少ない。
- ・ 犬を保護するための施設が少ない。
- ・ 導入したものの、不適性と判断された犬の引取先の確保が困難である。

## 2. 介助犬の仕事・役割

盲導犬、聴導犬と違い、仕事内容が定まっていない。個々のニーズに合わせる必要があるため、犬の適性評価およびトレーニング方法がニーズによって異なってくる。

介助犬が行う仕事内容（動作）に対して、指示語を取り決めている。別紙1に示すが、その一部を挙げると下記のようなものがある。

くわえる	→	T a k e
引っ張る	→	P u l l
ボタンを押す	→	T o u c h
持ってくる	→	B r i n g
放す	→	G i v e
踏ん張る	→	B r a c e 等

約60語の動作の組み合わせで介助犬としての仕事を行う。

これによって、個々のニーズに合った仕事や新しいニーズの仕事への対応も可能となる。例えば、杖歩行の人が転倒し、介助犬の手助けで起立する時は、介助犬が転がった杖を手元までB r i n g → F r o n t で人の前につき、S t a n d、B r a c eで踏ん張ってもらっている間に介助犬を台の代わりとして起立する。

その他に、身の回りの物（電話の子機、新聞等）を持ってくること、ドアや冷蔵庫や棚などの引き出しの開閉、レシピエントの起立の補助、身体の移動の補助、就寝時の体位の移動交換、衣類の着脱、電気やエレベーターのスイッチのオン/オフ、歩行時の補助、車椅子での段差乗り上げの補助、緊急時の連絡手段の確保等がある。

### 3. 適性評価

適性評価は下記のように行った。

#### 1) 健康基準

チェック・リスト（別紙2参照）を作成し、獣医師に委託する。避妊・去勢手術を済ませている事、狂犬病・7種混合ワクチンの接種、内外寄生虫の有無を確認の上、トレーニングを開始する。

#### 2) 一般社会性

公共の場における一般社会性は盲導犬の基準（別紙3）に準じた。視覚障害者に対する危険を考慮し、盲導犬は厳格な基準を設定しているが、介助犬はこの点に関しては若干基準を緩めてよいと考えている。例えば、多少の脇見はよしとする。

#### 3) 介助犬としての適性

レスピエントのニーズにより、介助犬に必要とされる動作は異なってくるが、動作能力として最重要とされているのは **B r i n g**（物を持つてくること）である。B r i n g は、口先や前足で物を持つという器用さがあるか、かつ、物を取ることに對して強い興味を示し、喜んで仕事ができるかという点で、介助犬としての適性を見る上で最も重要な判断基準となる。さらに、この B r i n g はドアの開閉、スイッチのオン／オフ、衣服の着脱、体位移動／交換等、他の動作への応用性も高い。

この点が盲導犬、警察犬、家庭犬とは最も異なる。

具体的な検査方法は別紙4に示した。

#### 4) 評価段階

介助犬の正式候補犬になるためには2段階の審査がある。

- ① トレーナーが出向き、外見のみの簡単な健康チェック及び適性（b r i n g）をテストする。～第1次審査
- ② 第1次審査を合格した犬がトレーニングセンターに1ヶ月間仮入所し、獣医師による詳しい健康チェック及びトレーナーによる一般社会性、介助犬としての適性を観察する。～第2次審査
- ③ 第1・2次審査を合格した犬が、正式な候補犬となる。

### 4. 候補犬の導入計画

序文で述べた理由により、候補犬の導入は成犬（1～2才）を盲導犬協会、公的機関（保健所、動物保護センター）、民間動物愛護団体、民間訓練所等の諸団体、又は個人からの譲渡、提供又は購入で行うことにした。

## 5. 候補犬の導入結果

候補犬の導入は、下記の諸団体からの譲渡、提供又は購入により行った。

1999年2月26日現在					
区分け	団体名	テスト数		採用数	負担額
		第1次	第2次		
1) 盲導犬協会	日本盲導犬協会 中部盲導犬協会	12 9	1	1	提供
2) 動物愛護 団体	アニマル・リフュージユ・カンサイ アニマル・ファンスイアーズ・スクール	10 8			
3) 動物愛護センター	兵庫県尼崎市動物愛護 センター	2			
4) 警察犬訓練所	愛犬警察犬訓練所	1	1		17万円 注)
5) その他	個人寄付 個人レスキュー・グループ 家庭犬訓練士	2 1 1	 1 1		提供 提供
計		46	4	1	

注) 第2次テスト通過時に17万円で購入したが、ボランティア犬として引き取りをしてくださる方が購入費を負担していただいたので、実質上の購入費は掛かっていない。

### 〈第一次審査において〉

全体的には、①大型犬が少ない、②不採用犬の引き取り先の確保に苦勞する、③導入元（各団体）は最初、介助犬の大まかな適性を理解していないので時間・交通費が掛かる、という問題点があった。

個別に見ると、各団体で各々、長所・短所があった。

- 1) 盲導犬協会は、繁殖からパピー・ホームでのしつけを盲導犬としての適性に重点を置いているため、介助犬に適さない犬が多いという印象があった。長所としては、譲渡で費用が掛からない、不採用犬の引き取りをしてくれるという点であった。繁殖の段階で、遺伝的疾患や性格異常について厳しい基準があるため、心身とも健康な犬であった。
  - 2) 動物愛護団体および3) 動物愛護センターは、放棄犬の譲渡または家庭犬のしつけが目的であるため、中型犬が多く、介助犬に適した大型犬が少ない。
  - 4) 警察犬訓練所はトレーニング方法の違いに注意が必要なこともあるが、今回1次審査（bring評価）で1頭採用されたことから、素質のある大型犬がいる可能性は高い。
  - 5) 個人からの寄付は、元飼い犬ということで情が残り、トラブルの素となることがあるので、買い取りのみ受け付ける等のシステム作りが必要である。
- 2)～5)は共通して、不採用犬の引き取り先の確保に苦勞した。

## 〈第2次審査において〉

- 1) 盲導犬協会 : 1頭採用 (ラブラドル・レトリバー、オス、1歳)
- 4) 警察犬訓練所 : 一般社会性、bring評価はよかったが、健康面で股関節形成不全 (遺伝的疾患) のため不採用 (ラブラドル・レトリバー、メス、1歳)
- 5) 個人レスキューグループ : 健康面はよかったが、一般社会性の面で不採用 (ラブラドルとゴールデンの雑種、オス、1歳)  
家庭犬訓練士 : 健康面、一般社会性はよかったが、bring評価の面で不採用 (ラブラドル・レトリバー、1歳、メス)

\* 3月初旬に2カ所の盲導犬協会において適性テストを行う。  
今回、最終的には3頭の候補犬を導入する予定である。

## 6. 今後の課題

各団体職員へ介助犬の適性テスト、評価について理解してもらえよう指導し、各団体で事前評価を行い、候補犬導入の効率を上げることで交通費の削減、人員不足の穴埋めを図る。

## 7. まとめ

欧米では公的機関も含め、介助犬の団体と犬の育成団体の連携がとてもよく取れていて、候補犬の導入が円滑になされている。日本においても欧米のようなシステムが確立されていくことで、時間や費用はかなり削減されることだろう。

また、犬に対する考え方を家庭犬のレベルから改善し、繁殖についても欧米並の厳しい基準を設置するなど、日本の犬を取り巻く環境を少しでも良くすることが候補犬の導入に大きく関わってくることは言うまでもない。